

モンゴルの経済と統計事情について

石 田 晃

1. はじめに

今日は、この公開講座の一つとして「モンゴルの経済と統計事情」についてお話したいと思います。与えられた時間は午後3時迄の2時間ですが、大体2時半乃至2時40分頃迄お話しして、残りの時間を質疑応答に当てたいと思います。

初めに、自己紹介を兼ねまして私とモンゴルとの関わりについて簡単にお話したいと思います。

私は本年の4月から敬愛大学の教授として統計学を教えておりますが、それまでは30年間、現在の総務庁、その前身の行政管理庁で主として統計の仕事をしてきました。この間、政府派遣の国際公務員としてニューヨークにある国連本部に3年間、タイ国バンコックにある国連の地域委員会ESCAPに3年間統計の仕事で勤務し、役所を退職した後は東京にあります国連のアジア太平洋統計研修所というところで4年間副所長兼講師として東南アジアを始めとする開発途上国政府の統計職員を対象に統計を教えてきました。これらの研修生の中にも毎年1人乃至2人のモンゴルからの者もいまして、現在モンゴル政府統計局には研修所での私の教え子は7人ほどいます。この外に、国連開発計画、通称UNDPと呼ばれていますが、これの資金を使って研修所が毎年10ヶ国以上でカントリーコースと言って特定のテーマについて講師がその国に行きまして講義と訓練を行っています。私も、モンゴルへこのカントリーコースで2回行っておりまして、最初のは1990年12月に3週間、2度目は昨年8月に2週間行きまして、国民所得と経済統計について教えました。社会主義国の統計はマルクス経済学に基づいて作られていますので、資本主義国の統計とは基本的なところで違っていますので、資本主義国の市場経済に移行するにも種々な点で統計の作り方を変えて行かなければなりません。今日は国民所得や経済統計の講義をする場ではありませんので省略しますが、これからお話しするように、社会主義国がその経済の仕組みや運営を資本主義国のいわゆる市場経済に移行するのはかなり大変です。特に、資本主義経済の経験を全く持っていない旧ソ連やモンゴルがそうです。旧東ドイツや中国、ベトナムとはこの点で大いに違うと思います。ご承知のように、20世紀は

共産主義の資本主義に対する壮大な挑戦と実験の世紀であったと言われています。そして、資本主義が勝ったとも必ずしも言えないのですが、少なくとも共産主義がその自らの欠点のために破れ去ったと言われています。ソ連は1917年のいわゆる3月と10月革命で農奴制を基礎とした王政を倒し共産党1党独裁による社会主義国家を作ったわけですが、モンゴルも1921年にソ連赤軍の援助によってそれまでの中国からの支配を脱して独立を得たわけですが、その当時のモンゴルは封建貴族とラマ教寺院に支配された農奴制に近い封建国家でありました。その点で、第二次世界大戦後社会主義国家となった東欧諸国や中国、ベトナムとは違います。モンゴルは世界でソ連に次いで世界で最も古い社会主義国と言われるのもこのような経緯があるからです。

また、日本とモンゴルとの係わりとしては、(1)日本人とモンゴル人の顔がよく似ているということです。ウランバートルの街を歩いていても日本人とそっくりな人によく会います。蒙古斑があるのも日本人と共通で中国人で赤ちゃんの時蒙古斑があるのはそれほど多くないようです。(2)鎌倉時代のフビライ・ハンの元朝による日本侵攻、いわゆる元寇の変(1279年と1281年)はあまりにも有名です。(3)1939年のノモンハン事件、モンゴルではハルハ河会戦と呼ばれていますが、60才以上のモンゴル人にとっては日本との係わりでは忘れられない戦争です。この事件そのものは当時満州国とモンゴルとの国境が定かでなかったことから日本軍の国境侵犯を機として戦争がおこりソ連とモンゴルの連合軍に日本が大敗北を喫した事件でした。この事件については日本が負けたこともあって私共は歴史であまり習いませんでした。しかし、この事件の背後にある1932年の満州国設立を契機として、ソ連は日本軍のシベリア進出を極度に警戒しこのためモンゴルに対する締め付けが一段と厳しくなり、1935年から1938年にかけて首相、国防大臣、軍団長が日本帝国主義の手先という罪状でモスクワに呼ばれ処刑されています。これらの人達はいずれもノモンハン事件以前に起きた満州国とモンゴルとの国境侵犯事件で事件解決に向けて日本、満州国代表と外交交渉をしていた当事者でした。

また、満州国設立を機としてソ連軍の駐留も始まりました。第二次大戦後日本軍のシベリア抑留者の一部1万4千人がウランバートルに抑留されたのもこのような経緯からです。この人達が建てた国立オペラ劇場や市庁舎は今でも立派な建物として使われています。

2. モンゴルの概況

(1) 地理と気候

モンゴルの経済を理解して頂くには地理と気候も多少知って頂く方が良いでしょうと思いますので簡単に説明いたします。

お手元に配布しましたレジュメをご覧くださいと分かりますように、モンゴルは北でロシア共和国、東南から南西にかけて中国と境を接しています。いわばロシアと中国という二つの大国に囲まれた陸の孤島のような位置にあります。国土面積は157万平方kmで、日本の約4倍の広さをもっています。人口は1993年に225万人です。人口密度から見ると1平方km当たり4人で日本の333人に比べて如何に広々としているか分かります。首都ウランバートルは海拔1351mの高地にあり、国土の約80%は草原で遊牧に適しています。気温は、冬10月から翌年3月までが氷点下で、1月は平均気温マイナス25度で、屢々マイナス45度迄下がります。4年前の1990年12月に行った時も、マイナス25度から30度の日はざらで、そのようなときはかなり防寒着を着て、靴下の中、爪先に粉の揉むと暖くなるカイロを入れても10分も屋外に立っているとまず爪先が痛くなります。夏は7、8月に平均気温で15-16度まで上がり、日が照っていると20度ぐらいになります。湿度は年平均50%以上70%未満でからっとした大陸性気候です。

(2) 歴史

アジア大陸の東北部分にありますモンゴル高原一帯には旧石器時代の遺物が数多く見つかっており、また、新石器時代の狩猟民が住んでいた痕跡があるようです。この地方には古くからモンゴル系、トルコ系、ツングース満州系などの人々が入り混じって生活していたと言われるが、紀元前2世紀頃きょう奴という強大な遊牧国家が現れます。中国の歴史で漢の時代のものを読みますときょう奴の北からの侵入に如何に悩まされていたか分かりますし、実際、漢が滅びたのもきょう奴征伐で軍費に窮して疲弊したためでした。きょう奴が漢に滅ぼされたあと、ウィグル帝国（744年－840年）、契丹（930年－1125年）等の遊牧民族国家の後にモンゴル帝国（1206年－1368年）、元朝（1271年－1368年）ができました。モンゴル帝国のジンギス・カンやその子供達によるアジア大陸の制覇は有名ですが、また、ロシア、現在の東欧諸国への侵略も良く知られています。日本との関係では、ジンギス・カンの末っ子の子、孫にあたるフビライ・ハンが北京に都を置いた元朝による日本侵攻、いわゆる元寇の変（1279年と1281年の2回）があまりにも有名です。元朝が滅ぼさ

れ明の時代は、モンゴル各部族の勢力争いに明け暮れ、次第に勢力が衰えていきました。しかし、満州人の建てた清朝の時代（1644年－1911年）には、その勢力はモンゴル高原にまで及び、初めに内蒙古、次で17世紀末には外蒙古も支配下に入った。この時代、中国人の内蒙古への入植が奨励され、この為、現在モンゴル族としては350万人と最も人口が多いけれども、内蒙古では人口（23百万人）の約15%を占めているに過ぎず、清朝の政策が現在のモンゴルの国境を定める上で大きく影響を与えたと言えます。また、きょう奴やモンゴル等の遊牧民族国家の歴史上果たした役割としてシルクロードに代表されるような東西文化交流がこの時代大変活発であったことです。皆さんご存知のベネツィアの商人だったマルコポーロは元朝に17年間も仕え東西の交流に尽くしましたが、また、彼の「東方見聞録」は日本を「黄金の島ジパング」として紹介されたことでも有名です。

しかし、モンゴル帝国が1368年に滅んでから歴史から忘れ去られるように強大な国家が西アジア大陸に出てこなかったのは不思議ですが、一説には、バスコダ・ガマのインド航路の発見やコロンブスの新大陸発見に象徴されるような15世紀末以降の海上交通の発達によって、シルク・ロードという東西交通の幹線路の地理的優位性が失われ、経済的にも文化的にも遅れてしまった為と言われてしています。

(3) 宗教（ラマ教）

現在のモンゴルの人々を精神的に支えている宗教はチベット仏教の俗称とも言われるラマ教です。

私は宗教の専門家ではないので受け売りですが、ラマ教の特色は、一般仏教のいわゆる仏・法・僧の三法の上にラマを加えた四宝の帰依にある、といわれています。ラマとはチベット語でラ（上）、マ（人）、すなわち上人または師を意味していて、ラマ教では師匠に対する依存度が他の仏教よりも遥かに大きいようです。モンゴルにラマ教を広めたのは元朝のフビライで、モンゴル帝国が滅びた後も諸部族は競ってラマ教を広めたといわれています。何故、このようにラマ教を諸部族が競って広めたかには色々説がありまして一つは当時モンゴルよりも遥かに進んでいたチベット文化を取り入れて近代文化を図る目的のほかに、それによって中国文化に対抗しようという政治的狙いがあった、というもので、事実ラマ廟がモンゴル人の社会的、精神的なよりどころとなってモンゴル民族の民族意識を支えたと言えます。

このことは、モンゴル帝国時代西方に発展しイスラム教を取り入れたモンゴル人は現地

に定住しことごとく同化，吸収されてしまった。これらモンゴル人の子孫が現在旧ソ連連邦内でイスラム教徒が比較的多いカザフスタン，タジキスタン等の共和国に住むイスラム教徒と言われています。

また，別の見方として清朝が巧みにラマ教をモンゴル人統治のために利用した，というものです。事実清朝はラマ僧に役務や課税の免除などの特権を与えるなどの奨励をし，民衆の間に強固なラマ教の教え，例えば災厄を運命として諦める無抵抗主義や，現世を求める為の闘争を否定するなど，ラマ教の教義は好戦的なモンゴル民族に恭順の精神を植え付けるのは統治者にとって好都合であったと思われます。いづれの見方が正しいか分かりませんが，恐らく両方ともある程度真実が含まれていると思います。

(4) 文字

モンゴル文字の始まりは，13世紀にウイグル文字を元にして作られたとも，8ないし9世紀にソグド文字（ウイグル文字の元となった文字で，アラビア文字と同じ源を持つと言われる）を直接受け入れて作ったともいわれています。お手元に配布したレジュメの中のモンゴルの地図のわきにモンゴル文字で書かれた名刺のコピーがありますが，これがモンゴル文字で，縦書きで日本の毛筆のようなもので書きます。しかし，1941年からはキリル文字と言ってロシア語のアルファベット文字で書くようになって現在までできておりますが，最近の民族主義の高まりの一環としてモンゴル文字の復活が決定され，数年以内には教科書，新聞，公文書はモンゴル文字で書かれると思います。モンゴル語自身は日本語，韓国語と同じアルタイ系の言語に属していると言われており，主語＋目的語＋動詞という語順は日本語や韓国語と全く同じです。ここでモンゴル文字からキリル文字に切り替わった経緯について簡単に説明したいと思います。ご承知のように旧ソ連には民族が約70，言語も約70使われていました。いわば多民族国家の典型のような国です。1930年代の半ばからソ連はスターリンの指導のもとで共通文字化を進めており，一時ラテン語の使用も検討されたようですが結局ロシア語の文字であるキリル文字を各民族語の発音にあわせて使うことになったわけです。但し，歴史の古いアルメニア語とグルジア語はそのまま残されました。ロシア国内には現在のブリヤート自治共和国を中心として約50万人のモンゴル人がおり，モンゴル語を使っていたのでこれらの人達のモンゴル語のキリル文字化が行われました。ついでソ連の衛星国であったモンゴルの言語も1941年にキリル文字化されていったわけです。いわば強制されてキリル文字化されたわけです。ソ連邦の崩壊の後モン

ゴル文字への復帰が決定されたのもこのような経緯から当然の成りゆきと思われます。

3. 政治状況

お手元のレジュメの3頁めにありますように、1921年にそれまでの中国統治から脱しまして、独立したわけですが、独立に際してロシア赤軍の力を借りたことから、必然的に共産主義国家になる運命を持っていたと言えます。そして1924年に独立当時国家元首に頂いていたラマ教活仏が死ぬと、共産主義国家になり、1990年共産党一党独裁体制を放棄するまで、共産圏の一員として、またソ連の強力な指導の下で数年前までやってきたわけです。前にも触れましたように、地政学の上で、モンゴルは極めて厳しい地理的な位置にあるといえます。ロシアと中国という二つの大国に囲まれ、海への出口をもたないと言う国を四方を海で囲まれている日本人の我々からは想像出来ないものがあります。ましてジンギス・カンという世界的英雄を持ち、誇りの高いモンゴルの国民にとって、ロシアと中国の両方と仲良くしながら権益を犯されずに発展を図っていかなければならないわけで、ロシアと中国が友好関係にある時は問題は少ないですが、一度両国が対立関係に入ったときは大変だと思います。何れにしても目下のところはロシア中国共に市場経済の導入と経済の発展に最大の努力を払っているところですから、当分の間はモンゴルも市場経済の発展に専念出来ると思います。政治の体制や仕組みについては時間の関係で省略させていただきます。

4. 経済状況

(1) 一般的状況

レジュメでは一人当たりGDPを1993年に156ドルと示していますが、これは私がモンゴルの統計書から推計したもので、必ずしも正確なものではありません。フィリピンやインドよりかなり低いことを考えると、国民所得の推計が可成り実体より低いか、または1\$=400ツグリクというドル換算のために使った為替レートが低すぎるか何れかまたは両方に原因があるかもしれません。しかし、何れにしてもどう高く見積もっても400ないし500ドルでフィリピンよりは低いとおもわれます。

また、その下の表には部門別実質成長率が年次別に示されていますが、これを見ると1990年以降GDPがマイナス成長に転じており、鉱工業も1991年以降マイナスになっております。後に社会主義計画経済から市場経済への移行についてご説明しますが、この移行が実施されたのが1990年から1991年にかけてでありまして、それによる経済的混乱、とり

わけ物価の上昇がひどく、食料品を始めとする日用品の価格が自由化されたこともあって年に5倍以上の値上がりがあったようです。当然のことながら政府の職員の給料は物価の上昇に追いつけ得ませんで、昨年8月にモンゴルに行った時、統計局次長というかなり高い地位にある人が、自分の給料では主食の肉は半月分を買うのがやっとだと嘆いていました。

しかし、この経済的混乱の最大の原因は市場経済の移行に伴って起こったものとは私は考えていません。ロシアの経済の混迷はまさに計画経済から市場経済への移行過程に伴うものですが、モンゴルの経済は人口規模225万人から見ても市場経済といっても政府がある程度管理できる規模のものです。それでは、最大の原因は何かというと、1991年のソ連の崩壊とコメコンと言って社会主義諸国の相互援助機構の解体が決定的だったと思います。モンゴルの鉱工業はソ連と東欧のコメコン加盟諸国の資金と技術援助によって発展したものです。例えば、お配りしたモンゴルの地図を見ますと、首都ウランバートルの北にダルハンという町があります。ここは、ウランバートルに次いで二番目の鉱工業都市ですが、今から35年前は単なる草原に過ぎませんでした。この町の基礎は、まず、豊かな埋蔵量を持つ石炭の発掘とその石炭を使った発電所の建設によって築かれたわけですが、それらは全てソ連の援助によって達成されています。またその電力は、諸外国からの援助で作られた工場の動力になっています。例えば、ポーランドは煉瓦工場を、チェコはセメント工場、ハンガリーは食肉コンビナート、ブルガリアは皮革工場、ソ連は木材建築資材工場という具合に、工業化は全てコメコン加盟諸国の援助でなされてきました。高々35年程度の期間にGDPで40%弱を占めるまでに発展できたのは驚異的なことですがこれもコメコンのメンバーの一員であり計画経済によったからとも考えられます。もっとも、メリットがあればその反面デメリットがあるのもよくあることですが、これらの工場の建設がもっぱら外国の技術者によってなされたということはこの面での技術者が育たなかったと言えるわけで、今日開発途上国が単に工場その他の建設援助だけでなく技術移転を含む専門家や技術者の育成を強く要望していることと同じ問題です。しかし、ソ連のコメコンを通じての援助には、コメコン加盟国間の国際分業の方針が強く貫かれており、モンゴルには石炭、銅、モリブデンなどの鉱山開発以外には、牧畜に関連した皮革・食料品工業などかぎられた工業だけが援助で発展させられています。従って、日用品などの軽工業製品、例えば、紙製品、プラスチック製の家庭用品等々全てを輸入に頼っています。また、石油資源は国内にあるようですがその開発は最後までソ連に認められなかったため、ガソリンを始

めとする石油製品は全てロシアからの輸入に依存しています。このようなことから、お手元の資料5頁にあります毎年の輸出入は大幅な赤字で、これをソ連からの資金援助で賄ってきました。ソ連の援助が無くなった1991年には大幅な輸入の削減がなされ物価の騰貴と生産の低下をきたしたのは当然の成りゆきだと思います。また、発電施設を含む工場の機械が西側先進国からみると陳腐化しているのが多く、発電所については日本の技術援助で大幅な更新が行われています。このことはかつて社会主義国の優等生と言われていた旧東ドイツを見れば明らかだと思います。

一方、輸出入のための輸送路は、ソ連または中国経由で鉄道輸送するか、航空輸送（ウランバートルー北京、イルクーツク、モスクワ間）に頼らざる得ず、しかもモンゴルー北京間の鉄道は、モンゴル側が広軌道（1528ミリメートル）であるのに対し、中国側が標準軌道（1453ミリメートル）であるため国境で積み替えをするか車輪を付け替えなければならず、日数と費用がかかるというハンデを持っています。以上モンゴル経済を簡単に概観しましたが、以前のようにソ連、コメコン加盟諸国に技術面と資金面で一方的かつ大幅に依存することなく、健全な市場経済を発展させていくことは、かなり困難を伴いますし長い年月を必要とするでしょう。モンゴルは今日日本の資金と技術援助をかなり期待しているのは以上のような背景があるからです。また、これまでのソ連、東欧一辺倒の経済的結びつきからアジアの一員として発展していこうという熱意に燃えています。

(2) 牧畜と耕種農業

モンゴルといえば私たち日本人はジンギス・カンと遊牧民族を連想しますが、事実これまで述べてきた工業化が進んだとしても基本的には牧畜を中心とした国であると思います。1993年の統計によりますと就業者総数77万人のうち農業は30万人（39％）で、鉱工業は12万人に過ぎません。

モンゴル高原は世界でも有数な牧畜に適した処と言われています。それは国の大部分がゆるやかな起伏を持った高原とゴビ砂漠でしめられており、高地で雨量も少なく乾燥しているとはいえ、その少ない雨が短い暖かい夏の間に集中的に降るため、草の成長に極めて適している。モンゴル高原は、端的に言いますとシベリア大森林（タイガと呼ばれていますが）とゴビ砂漠の間に広がる地域で、タイガから砂漠への移行地帯とも言えます。砂漠と言っても草原に近い処には草もまばらですが生えており、ラクダなどはむしろこのような地域に放牧されています。

現在モンゴル人が飼育している家畜は総頭数で1993年末に2518万頭でその内訳は羊(1378万頭)、ヤギ(611万頭)、牛(273万頭)、馬(219万頭)、ラクダ(36万頭)の5家畜です。

モンゴルの牧畜は1940年に2600万頭いたといわれる頭数をその後一度も超えたことがなく、その理由としてよく言われるのは、(1)ネグデル(農牧業協同組合)による集団化政策により牧畜業が停滞したこと、(2)肉、皮革、同製品、毛等はモンゴルの主要な輸出品で対外支払いのためかなり無理をして家畜を処理した、等が挙げられている。特に第2次世界大戦中はソ連軍への協力のため、食肉の輸出、贈与が行われ戦後も年間200万頭から300万頭輸出していたと言われます。この間に人口は74万人から225万人に3倍増加していることを考えると、物価自由化政策で肉の値段が急騰したのも理解できます。

(遊牧民の実態)

モンゴル人はこれらの家畜を一定の地で飼育しているのではなく、草原の中を一年を通じてよりよい草と水をもとめ、家畜の成育のためよりよい適地を求めて渡り歩く。家畜にとってまず第一に必要なものは牧草ですが、家畜が好んで食べる草と好まない草があり、また、ある家畜は好んでも他の種類の家畜は好まないといったことがあります。従って、家畜が好む牧草が十分にあるのが第一の必要条件ですが、第二に必要なのは水で、水が豊富にあることが必要です。しかし、寒暖の差が激しいモンゴルでは夏に利用できる水も冬は凍結して全く利用できず、冬は家畜にとって雪が水の代わりにつかわれます。従って冬にはある程度の積雪が必要になりますが、それもあまり深くなると、家畜が雪を掘り起こしてその下の草を食べられなくなり、餓死してしまいます。第三の条件は家畜にとって住み良いことが必要です。夏は広々として風通しがよく、涼しく、蚊やブヨなどの害虫が少ないところがよいわけです。風通しが悪く湿気が多いと家畜も食欲がなくなり、体力がおちるといわれています。また、冬は寒風を遮る山や丘の麓がよく、日当たりのよいところ選ばれます。従って夏と冬の移動は当然ですが、その間にも季節の変化と時々状況に応じて牧地を変えていきます。

(モンゴル人の食生活)

遊牧民の食生活は肉と乳を基本的な食物としています。別に茶や穀物(パン)などを若干食べますが主食は肉と乳です。そして夏と秋は主として乳を飲み、チーズやヨーグルトに似た乳製品を食べ、冬と春に肉を食べます。この食習慣は永い間の遊牧生活によって培われ、その必要性によって生み出されて来たと思われます。夏と秋は家畜が沢山乳を出す

のでその間は出来るだけ乳に頼る。そして、乳が不足する冬と春になって初めて家畜を殺してその肉を食べるわけです。家畜は遊牧民にとって貴重な財産であって、できればなるべく屠殺してその数を減らしたくない。乳ならば家畜を殺さずに長期間くりかえし入手出来るからです。モンゴル人が最も好む肉は羊です。私が昨年モンゴルに言った際教え子の奥さんの実家が遊牧をしており、そこに招かれたのですが、羊を一頭殺してご馳走してくれました。話は少々脱線しますが、羊の殺し方に驚きました。まず、羊を横に寝かせ後足を膝でおさえ、前足を左手でおさえて小刀のようなもので脇腹を少しきります。そこから手を入れて心臓付近の大動脈を指でかききります。血がほとんどでないのに驚きましたが、解体しているとき分かったのですが、血は胸部の膜内にたまって出ないのです。羊はおとなく死んでいきました。また、肉の料理法で面白かったのは、石で出来た竈で家畜の糞を乾かした燃料を燃やし、拳大の石を熱していました。この焼けた石をドラムカンを少し小さくしたような縦長の高圧釜に肉と交互に入れまして、また、塩と胡椒のようなものを振りかけたうえで蓋をきっちり閉めます。二-三十分後に蓋を開けるとぼっという音と一緒に蒸気が吹き上がりました。いわば石の熱で蒸し焼きにしたわけです。肉は柔らかくとてもおいしかったです。

乳では牛乳、ヤギの乳、ラクダの乳も飲みますが、一番広く多くの人に飲まれているのは馬乳酒で、馬の乳は生のまま飲まず必ず馬乳酒にして飲む習慣のようです。馬乳酒はしぼりたての馬乳を牛の皮で出来た大きな革袋の中に入れてスキーのストックの形をした木の棒を上下させて攪拌してつくります。大体3千回ぐらい上下運動させると乳酸菌と酵母が馬乳とよく混ざり発酵してでき上がります。アルコール分は約2-3%ですのでそれほど強くありません。馬の乳がよく出る6月から9月位までが馬乳酒が作られる時期です。私も行っている間何度か飲みましたが、多少酸味があり、少し青臭い味がしますが、それほど飲みにくくはありません。しかし、ご飯がわりにこれだけ飲む気はしませんでした。

乳といえば、もう一つ面白い経験をお話したいと思います。それは馬の乳のしぼり方です。まず、4月から5月にかけて仔馬が生まれますが、草原に放されている仔馬を先に革で出来た輪のついた長い棒を持って仔馬を馬に乗って追いかけて捕まえます。仔馬は次々にロープにつながれていきます。すると、母馬は子供が心配ですので仔馬に近寄ります。すると、桶を持った牧夫、私が経験した時は私の教え子の奥さんの姉さんでしたが、仔馬に乳を飲ませます。仔馬が乳を吸ったかと思うと、すぐに離し、乳を絞り始めます。仔馬は搾乳の間わきに立っています。母馬の搾乳は日に夏の間6回ほど、秋には3回ほどおこな

われるようです。メス馬の乳槽は小さく、一回に出す乳の量は少ないですが、乳の出が盛んで乳槽がすぐ一杯になるので、このように日に何回も搾れるのだそうです。

（耕種農業の実態）

モンゴルは元々遊牧国家ですから、土地に定着して畑を耕すという伝統は持っていませんでした。内蒙古では清朝の時代に漢人の入植が奨励され、多くの漢人の貧農が南モンゴルになだれこみ、遊牧地が次々と耕地にされていきました。その結果この地方のモンゴル人は穀物を盛んに食べるようになりましたが、北のモンゴルでは第二次世界大戦まで穀物は食べてもわずかだったようです。

しかし、その後、国営農場による開墾が進められ1993年には54万ヘクタールの耕地で小麦等の穀物、ジャガイモ、キュウリ、トマト等の野菜が生産され国内自給が可能になっている。現在人口の半数以上が都市に住んでいるのですから、遊牧民と同じ食生活は出来ないわけで、皆肉は好物ですが穀物で満足させられている都市住民も多いと思います。

（3）市場経済への移行の状況

社会主義国家が市場経済へ移行する上で何よりも急がれるのが国営企業の民営化です。国営企業はもともと国家資金で作られたわけですから、いくなれば国民等しく持ち分を持っているとかんがえられます。このような考えから、ロシアでもモンゴルでも企業の持ち分（株と言ってもいいでしょう）との引き替え券を発行しました。モンゴルの場合は「資本投下のための権利書」通称クーポン券とされています。これは額面1万ツグリクで2種類のクーポン券からなり、一つは額面3千ツグリクのピンク・クーポン券と呼ばれるもので、所有者間で自由に売買出来、小規模の国有商店を買うのにつかわれます。もう一つは額面7千ツグリクでグリーン・クーポン券と呼ばれ比較的大規模の国有企業財産権の一部、いわば株を買うのに使われます。この「権利書」は、1991年5月31日までに生まれた国民にたいし老若男女の別なく等しく与えられ、1993年8月31日迄を有効期間としていましたが、昨年8月に行った時の様子から期限はかなり延期されたようです。またこの権利を行使するため証券取引所が設立されています。

ロシアの場合は、1992年10月から額面1万ルーブルの証券を国民に無料で配布し民営化対象の国営企業の財産権の一部株を買うことができますが、もれ伝わるところによると無記名で転売出来るためマフィアにかなり利用されているとのこと。

その他、市場経済に移行するためには数多くのことをやらなくてはなりません。法律の

整備もその一つで、金融機関の整備は民営企業の資金の調達のため不可欠ですし、そのため銀行法が必要です。また、商取引が安全確実に行われるためには日本の商法に相当するものも必要です。ロシアでは今マフィアが横行し脱税から殺人まで悪の限りを尽くしているように伝えられていますが、別の面から見ると、一説によると現在ロシアで商取引が曲がりなりにも行われているのはマフィアのお陰だという人もいます。それはこれまでの計画経済では個人の商業道徳は必要でありませんで、上からの指示、命令に従って物を動かしていればよかったわけですから、それがいきなり個人や企業の責任で商取引をやってよいことになって誰を信用して取引してよいやらわからず、売ったのに代金は支払われない、相手企業は知らないうち倒産して品物はとられる、代金は入らないという混乱が横行しているようです。このような時、マフィアの力を借りれば安全だというわけです。丁度、日本の終戦直後の混乱期を思い浮かべます。ロシアの経済が安定するにはまだ相当の年月が必要だと思います。モンゴルの経済もロシアのようなマフィアがはびこると言った混乱はあまり聞きませんが、先ほど申したコメコンからの援助が無くなり、陳腐化した機械設備で生産能率が悪く、外貨不足で修理用の部品が思うように輸入出来ないと言った問題を抱えています。例えば、農業用トラックの故障や部品の調達が困難なため農業生産に影響を与えていると言われています。また、物資不足のため、商品の価格自由化政策のため物価が高騰するやらで政府職員は生活に大変困っているようです。そのため汚職がいま問題になっています。

モンゴルの工業品で唯一国際的に評価されているカシミア製品についてお話したいと思います。

ウランバートル市内にカシミアの最新鋭工場があります。この工場は、日本の無償援助で1981年に操業を開始しているカシミア工場としては世界第一の工場です。

ご承知の方も多いと思いますが、カシミアはその柔らかい手ざわりと保温性のため、高級なセーターや襟巻、コートなどに使われています。それはカシミア・ヤギと言うヤギの一品種からとれた軟毛が原料となっています。ヤギも羊も体質が強く、粗食で厳しい気候にも耐えられるという特性を持っているので、山岳地帯や比較的不毛の地でも育つので大昔から飼育されてきました。我々日本人が羊というとオーストラリアの緬羊を思いますが、これは羊の中の毛羊種で、モンゴルの羊は毛皮用種と肉用種に属します。他方、ヤギは乳用のものと毛用のものとがありモンゴルのヤギは毛用で、インド北西部のカシミール地方の原産です。カシミア・ヤギは顔と4つ足以外は10乃至12センチほどの粗毛で覆わ

れていますが、この下に秋になると防寒用の軟毛が密生します。高原の厳しい寒さを凌ぐための自然の摂理です。それが春暖かくなると自然に脱毛しますので、それを櫛ですきとって集めます。一頭からとれる軟毛の量は250グラム程度で、外套一着を作るには30頭分が必要といわれており、従って、値段も高くセーター一着恐らく東京で買った数万円はするでしょう。この工場を援助で建てたいきさつとして言われていることは、1939年に起きたノモンハン事件に対し、日本政府が今後の両国の友好関係を発展させるための償いの気持ちを込めて援助したと言われています。

(4) 将来展望

モンゴル経済は今後どのようになっていくのだろうか、という期待と危惧が私の頭からはなれません。と言うのも、将来に期待を持たせる要素と危惧を抱かせる要素があいなかばしているからです。期待を持たせる一番大きな要素は人的資源です。社会主義国に共通していることですが、教育が国民に行き渡っており、文盲率はゼロに近い水準です。この点がアフリカ、東南アジア、南太平洋、南米の開発途上国と基本的に違うところです。例えば、アフガニスタンは文盲率71%、インド52%、マレーシア22%、ペルー15%、ブラジル19%、エチオピア76%というように開発途上国の国々の文盲率はかなりたかいです。このような労働力は訓練にも限界があり、労働力の質も低いので近代的な工場での労働力としてはあまり期待できません。この点でモンゴルは質の高い労働が期待出来ます。二番目は言うまでもなく牧畜業です。共産主義国家の下で、集団化政策が取られ、家畜を自分と家族のために飼育するという意識を失わせ、労働意欲を失わせたこと、価格を極めて低く押えられていたこと、等々が牧畜業の不振となり、1940年に2600万頭あった水準を一度も超えられなかったわけです。しかし、家畜の私有が100%認められた今後は明るい展望が広がるとおもいます。なにしろ、モンゴル高原という世界でも有数の牧畜に適した土地をもっているのですから。

他方、危惧を抱かせる点も多々ありますが、なかでも経済の発展にとって最も大きな制約は、ロシア中国という大国に囲まれた陸の孤島のような地理的条件です。両巨大国の狭間にあるという地政学的な不利な条件は別としても、海に面した港を持たず、中国ロシアの港へはかなり遠く、そこまでの鉄道輸送の問題もあります。日常品、機械設備、金属・金属製品の大半を輸入に依存している以上、輸出の促進は不可欠です。その輸出にこのような制約があることは大変なネックだとも思います。2番目は言うまでもなく資本主義経

済体制を全く経験してない国民が新しい市場経済にどの程度早く適応出来るかと言う問題です。戦後に社会主義国家になった東ドイツでも西ドイツとの合併後その適応に相当の年月が必要だろうといわれています。3番目は、健全な国家財政を作り上げるには税の徴収が不可欠ですが税金を自分で稼いだ中から支払うという意識の乏しい国民からどのように効率よく徴収するかの問題です。

その他問題点を挙げたらきりがなくいろいろありますが、総括して、モンゴルの経済はロシア中国の関係が友好に維持されており、いずれの国もモンゴルの経済権益を不当に犯さないかぎり、多少年数はかかっても成長軌道に乗って発展していくと思います。

5. 統計事情

(1) 発展途上国との違い

日本は世界でも一番統計が整備されている国の一つといわれています。アメリカ合衆国、フランス、ドイツ、オーストラリア、カナダ、英国等の国は統計の先進国と言われているのですが、これらの国と比べても日本は遜色なく、分野によっては遥かに進んでいます。例えば家計調査を毎月8千もの世帯にお願いして記入してもらい統計を作成している国はありません。それでも日本ではまだ足りないと言って、これから単身者世帯まで範囲を広げることを検討しています。また、農業統計も詳細な統計が作られていることで各国では驚いています。日本でこのように他の国に遜色ない統計が作られるようになったのは、勿論戦後ですが、吉田茂元首相や大内兵衛、有沢広巳という方々が戦後の統計再建に尽力され、国を再建するには統計を整備することが何より大事であるという信念に燃えて情熱を注がれたからです。そして日本の統計がアメリカと同程度の水準まで達したのはまだ高度経済成長が始まるかどうかという昭和30年頃です。このように一国の経済の成長は統計の発展が先行しているようにおもわれます。逆に言うと統計が十分整備してない国が経済成長だけ実現出来たと言う国はありません。

例えば、アジアNIES（新興工業経済地域）として韓国、台湾、香港、シンガポールの経済成長率が1980年代の前半から高くなり、世界の経済発展のモデルとも言われていますが、これらの国の統計の整備は1970年代の後半には達成されています。また、最近マレーシア、タイ、インドネシアが高い成長を遂げていますが、これらの国も1980年代に入って統計の整備を積極的に行ってきました。

モンゴルの統計には後でお話するように色々問題を抱えていますが、文盲率が低いこ

と、社会主義計画経済の下で政府に報告する習慣が身についていること、政府の統計職員のレベルが高いこと、等々他の発展途上国では見られない良い点がありますので、今後の急速な統計の発展が期待出来ると思います。

(2) 社会主義国の統計

社会主義国の統計には資本主義国の統計と幾つか違っている点があります。

一つは計画経済であり企業はすべて国営ですので政府の命令は絶対で報告を拒否することはありません。従って、その報告の詳細さと毎月又は月2回という頻度は相当なもので日本では到底考えられないような統計数字を求めています。昨年モンゴルに行った時統計局長が過去3年間で50%以上の報告を取りやめさせ統計の作成を中止したと言っていました。理由は計画経済を止めたこともありましたが、以前からこれらの統計を計画の作成に使っていないことを知っていたからだと言っていました。政府の役人は日本でもその傾向がありますが自分が所管している分野については出来るだけ使っても使わなくても把握しておきたいという本能が働きます。命令に服従させられる国営企業の担当者は拒否出来ません。日本では総務庁という統計の調整官庁があってむやみに各省は統計報告を企業からとれない仕組みになっていますが社会主義国にはこのような統計の調整機能を持った役所はありません。

二番目は統計の信頼性に欠けるということです。各国営企業は計画当局から生産目標、ノルマを毎年、毎月等で与えられ、それを達成することがなによりも重要です。従って、正しい数値を報告することは期待できません。ましてその数値で原材料その他が割り当てられ、支給されるとなればなおさらです。モンゴルの統計局長自身がこれまでの統計は全く信用できないと言っているのですから間違いありません。

三番目は、社会主義国では統計はすべて国家秘密で一般の国民には知らされません。統計年鑑には対前年の伸び率や構成比が示されているだけで、生の統計は人口、世帯数のようなものを除いて発表されません。日本やアメリカなど資本主義の国では報告者に少しでも還元しようと、統計数字は各省庁が報告者に還元するよう発表しています。その外、国民所得などはマルクス経済学に基づいていますので、資本主義国とは範囲などが違います。例えば、クリーニング屋さん、床屋さんの営業活動は物の生産ではないから生産活動となりませんし、国民所得には入りません。従って、市場経済に移行するということはすべてを資本主義国の統計に作りなおすことになります。私が二度モンゴルに行ったのも資本主

義国家の統計をどのように作ったらよいか指導に行ったわけです。

(3) 終わりに

現在のモンゴルの統計制度の問題点についてお話します。問題点は幾つかありますが、専門的すぎるので、そのうち一つだけお話したいとおもいます。それは、モンゴルの統計調査が国税当局と協同して実施しているということです。いうなれば、課税は統計調査で報告された生産高や売上高に基づいて行われています。日本を含め欧米諸国は統計調査を実施するとき神経質になるくらい統計調査報告は統計目的だけに使われ、課税その他の目的には絶対使われません、と繰り返し説明して統計調査に協力頂いてます。それは正しい数値や事実を申告してもらうためにどうしても必要なことです。それがモンゴルでは国税当局と協同して実施しているので吃驚しました。政府の説明としては税務当局の職員が少なく効率よくやる最も良い方法は統計調査とタイアップすることだといっています。どうも計画経済時代の政府万能意識から抜け出せないでいるとおもいました。

(いしだ・あきら 本学教授)